

その先の学びにつながる 東京書籍の『**詳解歴史総合**』



「探究」科目の学習で 活用できる力を育てます!

東京書籍の『**詳解歴史総合**』では、多彩な特設ページやコラムで、深い歴史理解につながるトピックをこまやかに解説。必修科目の「**歴史総合**」で一步踏み込んだ内容にふれることで、興味と好奇心を誘いながら、「探究」科目に向けた土台をも固めます。

近現代史の諸相を切り取る「**歴史のまなざし**」

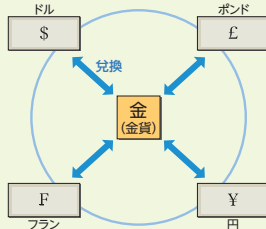


通貨制度の歴史 — 通貨の価値は何によって保証されているか？

■紙幣の誕生と近代的通貨制度の成立

古来、貨幣として用いられたものは金や銀などの貴金属であり、特に銀は世界の貿易の決済通貨としても広く流通した。一方、経済活動が活発化すると、貨幣を直接やりとりせず、商人や銀行が発行するさまざまな手形(貨幣での支払いを約束する証書)による決済が世界各地で行われるようになった。そして17世紀にイギリスの金匠(ゴールドスミスとよばれた金融業務も行う金加工職人)が発行した金匠手形(金との引きかえ証書)が広く流通したのが銀行券の起源といわれている。

現代のように中央銀行が紙幣を発行する制度が成立したのは19世紀前半のことで、それまでは民間の銀行や各国の政府がそれぞれ独自の紙幣を発行していた。しかし、紙幣の乱発は通貨の価値を不安定にするため、イギリスでは1844年に中央銀行であるイングランド銀行が紙幣発行を独占し、イングランド銀行券と金貨の交換を保証する兌換制度が確立した。紙幣を一定の重量の金や金貨といつでも交換でき(このような紙幣を兌換紙幣とよぶ)、また金の自由な輸出入が保証された通貨制度のことを金本位制(銀の場合は銀本位制)とよんでいる。その後中央銀行制度は世界に拡大し、日本でも1882年に日本銀行が設立された。

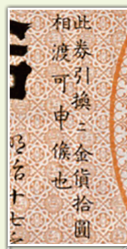


❶ **国際金本位制** 金本位制のもとでは、各国の通貨(紙幣)は一定の重量の金や金貨と自由に交換できる。たとえば、日本の1円紙幣は1円金貨(金含有量0.75g)と交換でき、アメリカの1ドル紙幣は1ドル金貨(金含有量約1.5g)と交換できるので、円とドルの為替相場は金を基準として1ドル=約2円で固定される。このように、国際金本位制のもとでは、異なる通貨が固定為替相場で結ばれる。

■国際金本位制の時代

1870年代に入ると、欧米の主要国があいついで金本位制を採用し、国際金本位制が成立した。銀本位制を採用していた日本も1897年に金本位制に移行した。金本位制が普及した最大の理由は、イギリスが産業革命後に世界経済の中心国として貿易・金融取引を拡大し、イギリスの通貨ポンドが基軸通貨(国際的な決済通貨)の地位を確立したことにある。国際金本位制のもとでは、各国の通貨間に金を基準として固定為替相場が成立するため、貿易の決済や海外投資を自由かつ円滑に行えるメリットがあった。その反面、国際収支の悪化などによって金が流出すると、政府や中央銀行は金本位制を維持するために国内経済の引き締めを行わなければならなかった。

1914年に第一次世界大戦がはじまると、各国は金の流出を防ぐため金本位制を停止した。大戦後、国際金本位制の再建が進んだが、1929年10月にニューヨーク株式市場が暴落し世界恐慌が発生すると、金融危機は世界に波及した。このとき、国際収支の悪化や投資の引き上げなどによって金の流出に直面した国は、金本位制を維持するため緊縮政策をとらざるを得ず、さらに景気が悪化する悪



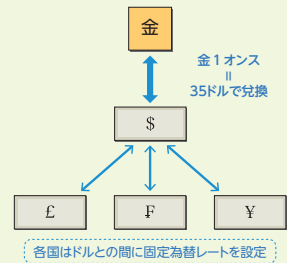
❷ **日本の金兌換紙幣(甲10円券)** 1897年の金本位制移行後に発行された10円紙幣。肖像画の左に「此券引換ニ金貨拾圓(十円)相渡可申候也」とあり、同じ額面の金貨との交換を保証した兌換紙幣であることがわかる。

循環をまねいた。1931年9月、急激な金流出に直面したイギリスが金本位制から脱離したのを契機に国際金本位制は崩壊した(日本は1931年12月に金本位制を脱離した)。

5 金本位制停止後、各国の紙幣は金との交換を行わない不換紙幣となり、その価値は各国の政府や中央銀行の政策によって維持される管理通貨制度となった。各国は自国経済の回復を優先する保護主義的な政策を行ったが、それが経済的な対立を加速させる原因ともなった。

10 ■第二次世界大戦後の通貨制度 — プレトン・ウッズ体制から変動相場制へ

世界恐慌と保護主義政策への反省から、第二次世界大戦後の資本主義諸国は自由貿易体制と安定的な国際通貨体制の再建をめざした。1944年7月の連合国通貨金融会議(ブレトン・ウッズ会議)では、国際通貨基金(IMF)と国際復興開発銀行(世界銀行)の創設が決議され、新たな国際通貨体制はブレトン・ウッズ体制とよばれた。その特徴は、アメリカの通貨ドルが基軸通貨として特別な地位を持っていたことにある。IMF加盟各国はドルに対して自国の通貨の為替レートを固定し、その水準を維持する義務を負うが、国際収支に基礎的不均衡が生じた場合は為替レートを変更できるとした(調整可能な固定



❸ **ブレトン・ウッズ体制** ブレトン・ウッズ体制のもとでは、米国ドルのみが金と交換することができ、他国の通貨はドルに対して固定為替レートを設定する。1971年のニクソン・ショックでドルと金との兌換が停止され、各国は固定レートの維持を放棄したため、現在は変動相場制となっている。

特設ページ「歴史のまなざし」は、**全18トピック**。

たとえば「通貨制度の歴史」では、金本位制から変動相場制までの流れをまとめて説明します。高校生にとって**イメージしにくい経済の関連事項を、ポイントをしばってコンパクト**に。

前近代の世界②

東アジアの伝統的な華夷秩序

東アジアの伝統的な世界観は、華夷秩序、あるいは華夷意識とよばれる。漢民族を中心とする伝統中国では、自国こそが中華（文明の中心）であり、周辺の諸民族を未開で劣った存在とみなした。また、古代以来、皇帝こそが天命を受けた世界唯一の支配者（天子）であり、その文明をしたって周辺諸民族は朝貢してくるもの、と考えられてきた。

本来の華夷意識は、どんな民族であっても中国の文明を身につければ「華」（中華）に近づけるといふものであった。周辺諸国は、中国にならい、それぞれを中心とする小さな華夷秩序をつくり上げていった。たとえば日本は、遣唐使を送って唐に学びつつも独自の律令制をつくり、華人や蝦夷を蕃夷とみなした。あるいは、皇帝の冊封を受けて国王に任命・認証されたにもかかわらず、その君主が冊封儀礼を規定通りに実施しなかったり、国内向けには皇帝のようにふるまったりする場合すらあった。

つまり、中国と周辺国とを結ぶ冊封・朝貢の関係は、もっぱら中国側の望む理想像であって、形式的な面が強く、内政干渉はほぼなかった。各国それぞれに都合よく外交関係を解釈できる余地が多分にあり、それが無用な衝突を避けることにもつながった。実際には、円滑な互市（貿易）こそが東アジア諸国共通の関心事であった。この点を逆手にとって互市の総量をおさえつつ、朝貢使節のみに貿易を許すという原則をとったのが明である。華夷意識を極度に先鋭化させた明は、モンゴル帝国ですら服属させられなかった日本を冊封することで自らの権威を高めようとし、また室町将軍は貿易をめあてに明の冊封を受け入れて積極的に朝貢した。

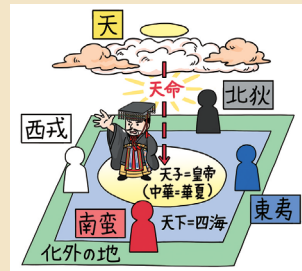
清代には朝貢儀礼を要さない互市の関係がふたたび主流となり、江戸時代の日本やヨーロッパ勢力も互市関係の対象とされた。19世紀なかばのアヘン戦争は、本質的には互市のルールをめぐる争いであり、欧米列強との間で結ばれた通商条約なども、互市関係の延長として解釈された。

こうして清の主観的な華夷秩序は守られたが、ヨーロッパ勢力にとっては、中国の伝統的外交体制は理解しがたい障壁とうつつた。清も欧米の影響を受けつつ冊封・朝貢関係を変容させていったが、冊封・朝貢国の減少などもあり、やがて西洋近代的な外交体制を採用せざるをえなくなった。

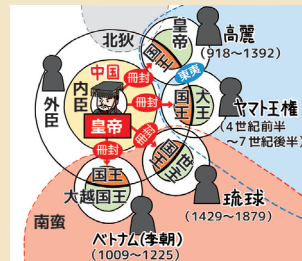


4 長崎に来航した中国船

18世紀、日本の長崎には、中国の民間商船が年間約30隻渡来することになっていた（海船互市新例）。長崎の役人や在留唐人などが出むかえたが、外交儀礼などはまったく行われなかった。



1 天下と華夷秩序 中国では、森羅万象を治める「天」が徳のある人間を「天下」の統治者として「天子」（皇帝）に任命し、その支配領域である「中華」の外側（「化外の地」）には、未開な異民族（北狄・東夷・南蛮・西戎）が住むとされた。



2 華夷秩序の広がりや重なり 中国の皇帝から国王に冊封されたとしても、各国の王が国内向けには皇帝のようにふるまったり、自国中心の華夷秩序を主張したりする場合がめずらしくなかった。



3 万国来朝図 18世紀後半、乾隆帝のもとに集まる朝貢使節を描いた、虚構の作品の一部。オランダ（荷蘭国）やフランス（フランス）、イギリス（英吉利国）など、現実には朝貢関係のない国々が登場する。

特設ページ「前近代の世界」は、近代史の前提となる5テーマを詳しく解説。それぞれ前近代史の要点となる大きなテーマを取り上げているので、「探究」科目での内容理解にも大きく役立ちます。

たくわえた力で、「探究」科目と、さらにその先の未来へ。

